

受傷体験が脊髄損傷者のセルフイメージに与える影響について

——文章完成法を用いて——

天 田 大 樹

本研究では、脊髄損傷者の受傷という危機的体験がセルフイメージにどのような影響を与えているのかを質的に明らかにしていくことを目的とし、SCTを用いて調査を行った。SCTは自分自身についてどのようなイメージを持っているかを明らかにしやすいと考えられる5つのカテゴリー（①自己の過去・現在・未来に対するイメージ、②自己の能力に対するイメージ、③自己の価値観を測り得る項目、④自己の身体イメージ、⑤他者から見ての自己イメージ）に基づく項目で作成し、全ての回答を肯定反応、否定反応、肯定否定反応、中立反応、回避反応、分類不能反応に分類した。群比較により検討するため、脊髄損傷者20名（脊損群）と健常者20名（健常群）を対象に調査を行った結果、以下のような結果が得られた。

カテゴリーⅠ「自己の過去・現在・未来イメージについて」：特に過去や未来について、脊損群のほうが健常群に比べ否定的な反応が少なかった。脊損群は中立的な反応を示した被験者が多く、過去の良い側面を見たり、自己の変化を客観的に見つめようとする傾向が窺えた。また未来イメージについては、健常群が不安感を示す反応が多い中で、脊損群は積極性や前向きなイメージを抱えていることが考えられた。

カテゴリーⅡ「自己の能力イメージについて」：特に自己の能力や自己を人と比較した時に、脊損群のほうが健常群に比べ否定的な反応が少なかった。「普通だと思う」などの中立的な反応が脊損群に多かったことから、身体機能以外の部分に目を向け、受傷で必ずしも自己の能力が落ちたとは捉えていないことが推察された。

カテゴリーⅢ「自己の価値観イメージについて」：価値観については仕事や願望などについて調査を行った。脊損群は仕事をするということに対して、生活していくことや収入を得ることとは違った価値付けをしていた。願望については、脊損群は社会に目を向けた反応が多く見られたことが特徴的であり、受傷体験が自己と社会との繋がりに影響を与えていることが考えられた。

カテゴリーⅣ「自己の身体イメージについて」：脊損群に肯定的な反応が少なかったが、肯定的な意味合いと否定的な意味合いを同時に表した反応が多く、肯定的な反応がなかったとは言えなかったが、否定的なイメージに引っ張られやすい傾向は認められた。また、回避的な反応が脊損群に多く、身体イメージに関する問題を受け入れ難いと感じている可能性が考えられた。

カテゴリーⅤ「他者から見ての自己イメージについて」：友人、異性、家族、世間から見ての自己の下位カテゴリーがある中で、特に家族について、健常群に比べ脊損群からはより質的な反応を得られた。これは、脊損群は危機体験を家族と共に経験してきたことによって、より親密な関わり方をしてきたことによるものと考えられた。